

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）は、2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す普遍的な行動を呼びかけています。



#### ◆座長

沖野 龍文 北海道大学大学院地球環境科学研究院  
兼 環境健康科学研究教育センター

湊屋 街子 北海道大学大学院保健科学研究院  
兼 環境健康科学研究教育センター

#### ■開会の辞

小笠原 克彦（環境健康科学研究教育センター長・北海道大学大学院保健科学研究院）

#### ■活動報告

「WHOCCの活動報告および今後4年間で目指すこと」

岸 玲子（WHO 環境化学物質による健康障害の予防に関する研究協力センター長  
北海道大学環境健康科学研究教育センター）

#### ■講演

「国際協力の現場でSDGsを考える」

吉田 早苗（独立行政法人国際協力機構（JICA）地球環境部 環境管理グループ）

開発途上国が抱えている課題の解決のために、日本が経験し学んできたことが役に立っています。私たちがとっくに乗り越え解決してきた課題だと思っていたら、まだまだ日本でも対策に苦慮していた、と知って驚くこともあります。JICAが行う国際協力では、各協力がどのSDGsの目標やターゲットに関係するかを示しています。ごみ問題や汚水処理など、環境管理分野でのJICAの取組をご紹介します。開発途上国も先進国も“誰一人取り残さない社会”について考えていきたいと思えます。

「地域の人々と未来のサニテーションをデザインする」

山内 太郎（北海道大学大学院保健科学研究院・総合地球環境学研究所）

現在、世界の人口の3分の1が設備の整ったトイレを使えず、9億人もの人々が野外排泄をしています。SDGs目標6では「安全な水とトイレを世界中に」と謳われています。しかし、トイレが使えるようになったとしても、「し尿」には何らかの処理・処分がなされなければなりません。サニテーションの問題は、トイレを設置すれば解決、という訳にはいかないのです。アフリカ、東南アジアの都市スラムにおける取り組みについて紹介します。

「環境と私たちの健康とSDGs」

アイツバマイ ゆふ（北海道大学環境健康科学研究教育センター）

身の周りの環境は、私たちの健康に大きな影響を与えます。SDGsの17目標のひとつ「すべての人に健康と福祉を」では、環境化学物質等による悪影響の減少が具体的なターゲットとしてあげられています。現在、世界的な規制により徐々に影響が減少している化学物質がある一方、いまだ影響が明らかでない化学物質も存在します。これまでの研究を紹介しながら、SDGsの達成に向けて何ができるのか、一緒に考えていきたいと思えます。